

経済的・キャリアパス支援

東京都立大学の支援

博士
後期課程
学生向け

「みやこMIRAI」プロジェクトでは、一定の資格要件を満たす学生全員※1を対象に、生活費相当額（年額240万円）を支給するとともに、授業料免除等の支援を行うことで、研究に専念できる環境を提供します。さらに、研究業績の優れた学生に対しては、2年次以降給付額を上乗せすることで、授業料免除と合わせて同世代の社会人の給与と同水準の支援※2を行います。

みやこMIRAI プロジェクト

※標準修業年限までの最大3年間

詳細はHPをご覧ください▶



- ・生活費相当：年額 **240万円**
- ・研究費：年額 **30万円**
- ・授業料免除：年額 **52万8百円**

コース別プログラムの提供
（履行義務あり）

- ・国際視座涵養コース
- ・多視座涵養コース
- ・社会デザインコース

※1 日本国籍を有する者、特別永住者等で、入学時30歳未満、標準修業年限内など、一定の資格要件があります。
 ※2 上乗せ支援により、年間約472万円相当の経済的支援を実現します。

国制度の支援

生活費相当額年額 **420万円**～・授業料免除年額 **52万8百円**

JST BOOST

次世代AIを志向した
領域リフレーミング
(Arena Reframing:AR)
双対型博士人材育成
プロジェクト

※標準修業年限までの最大3年間

- ・生活費相当：年額 **330万円**
- ・研究費：年額 **60万円**

・教育プログラム（履行義務あり）
メンタリング支援、キャリア・トランス
スファラブルスキルプログラム等の
提供


みやこMIRAIプロジェクト

※標準修業年限までの最大3年間

- ・生活費相当※：年額 **150万円**
- ・授業料免除：年額 **52万8百円**

※2年次から追加支給

JST SPRING

領域リフレーミング
(Arena Reframing:AR)
双対型博士人材育成
プロジェクト

※標準修業年限までの最大3年間

- ・生活費相当：年額 **240万円**
- ・研究費：年額 **30万円**

※留学生等は研究費のみ配分

・教育プログラム（履行義務あり）
メンタリング支援、キャリア・トランス
スファラブルスキルプログラム等の
提供


みやこMIRAIプロジェクト

※標準修業年限までの最大3年間

- ・生活費相当※：年額 **180万円**
- ・授業料免除：年額 **52万8百円**

※2年次から追加支給

JSPS DC

日本学術振興会
特別研究員制度

DC1・DC2

※DC1：最大3年間
 ※DC2：最大2年間

- ・生活費相当：年額 **240万円**
- ・研究費：年額 **150万円以下**



みやこMIRAIプロジェクト

※標準修業年限までの最大3年間

- ・生活費相当※：年額 **180万円**
- ・授業料免除：年額 **52万8百円**

※2年次から追加支給



大学院が拓く MIRAI

東京都立大学 博士後期課程学生支援プロジェクト「みやこMIRAI※」始動
～経済的支援を大幅に拡充し、研究に専念できる環境を整備～

※Motivating Integrated young Researchers towards Adaptive intelligence Initiative

近年、博士後期課程進学への経済的不安や修了後の就職への不安から、日本では博士後期課程への進学者数が減少傾向にあります。本学は、日本の研究力が低下することへの危機感から、学生のこうした不安に寄り添い、研究に専念できる環境を整備するため、これまで博士後期課程学生への様々な支援に取り組んできました。

令和7（2025）年度より、本支援プロジェクトを立ち上げ、博士後期課程へ進学する学生への経済的支援を大幅に増額し、安心して学問に集中できる環境を整えます。これにより意欲ある学生が切磋琢磨しつつ成長していくことを後押しし、研究力だけでなく卓越したコミュニケーション力と主体性にも支えられ、世界の幅広い分野で活躍できる次世代の高度専門人材を育ててまいります。

ぜひ本学で学問の奥深さとともに社会へ関わっていく面白さを体験し、変化する世界へ飛び出してってください。



学長 大橋 隆哉

若手が輝く 都立大の 研究者支援

博士後期課程学生支援とデュアルトラック制度

博士後期課程学生支援 プロジェクト

詳しくは
こちら
若手が輝く
都立大の研究者支援


いま、日本の大学生のうち博士後期課程に進む人はおよそ100人に1人。高度専門人材の減少が「失われた30年」の遠因とも言われています。これからの社会は、AIが多くの仕事を代替する情報化社会です。そんな時代に必要なのは、AIにはできない、0から1を創る人。それが、博士（Ph.D.: Doctor of Philosophyの略）です。海外では、博士号を持つ高度専門人材が活躍し、博士号を持たないと「スタートラインにすら立てない」ことも耳にします。

「博士」と聞くと、特定の分野に深く関わる人を思い浮かべるかもしれません。でも、今の博士は違います。社会とつながる実践的な学び、たとえば企業インターンシップや起業家教育（アントレプレナーシップ教育）なども取り入れられ、幅広く社会で活躍できる高度専門人材となる訓練を受けています。5年間の大学院生活は、学部の4年間とはまったく異なるレベルの挑戦。自ら課題を発見し、仲間と協力しながら解決し、社会に新しい価値を生み出す力を育みます。都立大では、十分な経済的支援を受けながら、こうした高度な学びに専念できる環境が整っています。

日本でも、博士課程修了者は初任給が高いというデータ※1もあり、政府および産業界からも積極的に博士人材を登用する取り組み※2が始まっています。労働者人口が大きく減少する現代社会において、ますます高度専門人材のニーズが高まっています。都立大なら、大学院に進んでも経済的に同世代と同じスタートラインに立てるだけでなく、高度な学術に裏打ちされた実践的知識を持つ高度専門人材になれる

——そんなMIRAIが、ここにあります。

※1 出典：経済産業省・文部科学省「博士人材ファクトブック」（2025年3月26日）P8

※2 出典：日本経済団体連合会「博士人材と女性理工系人材の育成・活躍に向けた提言」（2024年2月20日）P3

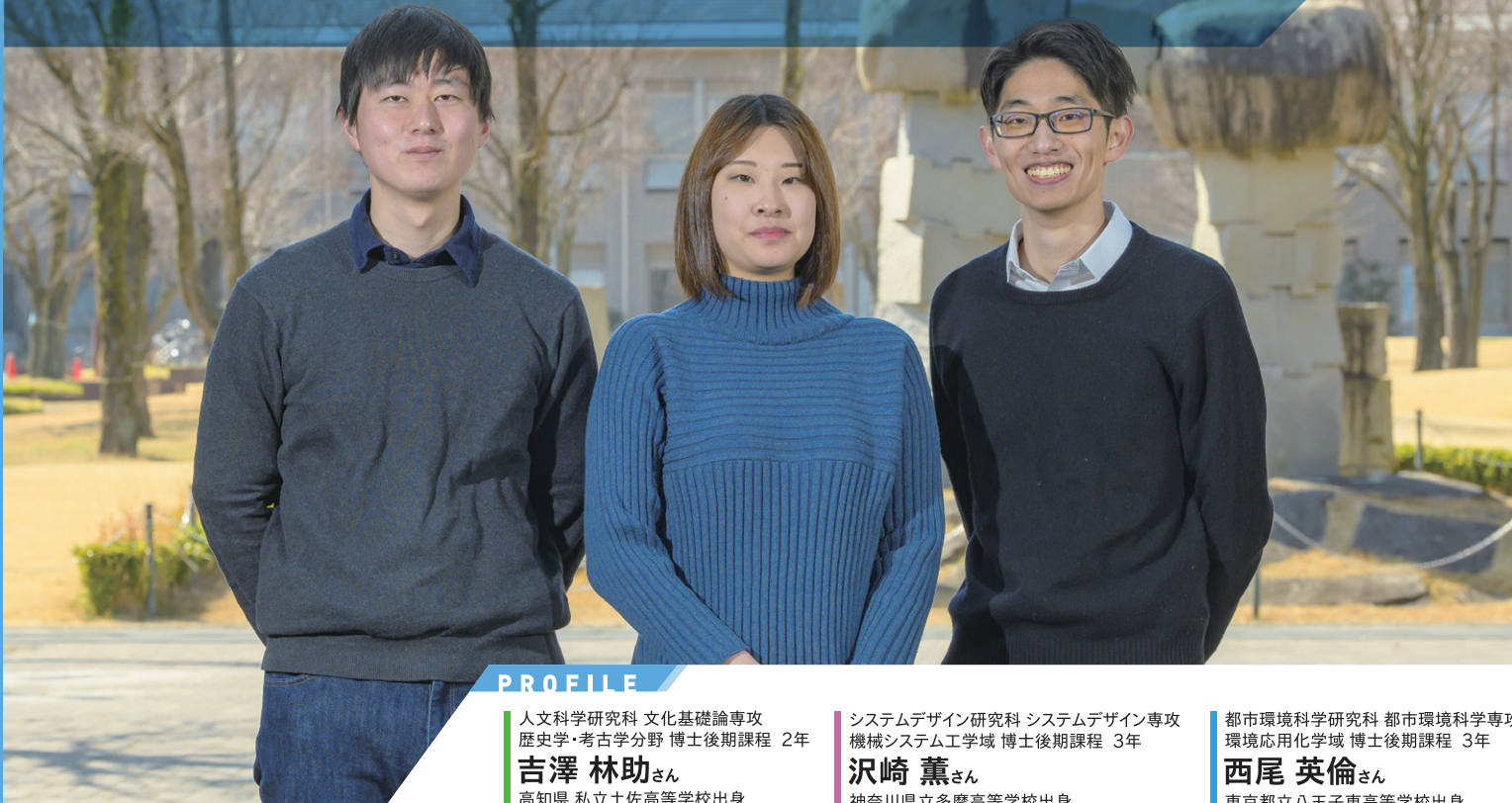


博士後期課程で研究を
続ける魅力を伝えます！

特別
企画

博士後期課程学生座談会

若手研究者の人材育成に力を入れる東京都立大学は、2023年度に博士人材支援室を開設。「博士後期課程学生支援プロジェクト」がスタートし、経済的な支援やキャリア支援、研究環境の拡充などを推進しています。今回の特集では、博士後期課程で研究に邁進する3名の生の声をお届けします。



PROFILE

人文科学研究科 文化基礎論専攻
歴史学・考古学分野 博士後期課程 2年
吉澤 林助さん
高知県 私立土佐高等学校出身

システムデザイン研究科 システムデザイン専攻
機械システム工学域 博士後期課程 3年
沢崎 薫さん
神奈川県立多摩高等学校出身

都市環境科学研究科 都市環境科学専攻
環境応用化学域 博士後期課程 3年
西尾 英倫さん
東京都立八王子市東高等学校出身

目標、背景も人それぞれ。多様性が学びを豊かにする大学院進学

——皆さんが博士後期課程に進学した経緯を教えてください。

吉澤 私は歴史を勉強したい一心で大阪大学文学部に入学し、在学中は中学の「社会」と、高校の「地理歴史」「公民」の教員免許を取得しました。卒業後は一般企業に就職しましたが、歴史研究の楽しさが忘れられず都立大大学院に進学を決意。一度社会に出ていますので親には頼らず、博士前期課程は学外の給付型奨学金と社会人時代の貯蓄でやりくりしました。博士後期課程では都立大の「領域リフレーミング双対型博士人材育成プロジェクト」に採用され、2025年度からは学振特別研究員

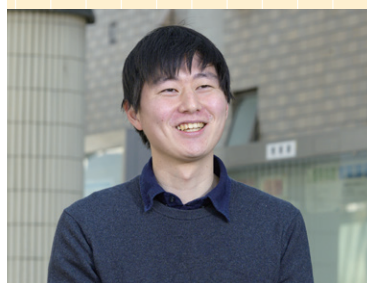
(DC2)※に切り替わります。

西尾 私にとって研究者は高校時代からの目標でしたので、博士後期課程への進学を前提に都立大に入学し、学部4年次から現在まで一貫して固体触媒を用いた

有機分子変換反応の研究に取り組んでいます。1・2年次は本学の「双対型博士人材育成プロジェクト」に採用されました。また、指導教員の研究プロジェクトでリサーチアシスタント(RA)として雇用され、3年次からは学振特別研究員(DC2)にも採用されたため、現在はRAと学振特別研究員の給料で生計を立てています。

沢崎 私は就職活動でのメリットなどを理由に都立大大学院に進学を決めたものの、博士前期課程はコロナ禍で思うような研究活動ができず消化不良に。それでも研究を続けていく中で、バイオエンジニアリング分野の研究が性に合うと自覚できたため博士後期課程にも進み、1・2年次は「双対型博士人材育成プロジェクト」、3年次からは学振特別研究員(DC2)から経済的な支援を受けています。

※学振特別研究員…独立行政法人 日本学術振興会の特別研究員制度。DC1・DC2・PDなど、特別研究員としての区分に応じて研究奨励金および特別研究員奨励費(科研費)が支給される。



吉澤 林助さん

“博士人材”といっても、十人十色の将来設計があっている

——普段から心掛けていることがあれば教えてください。

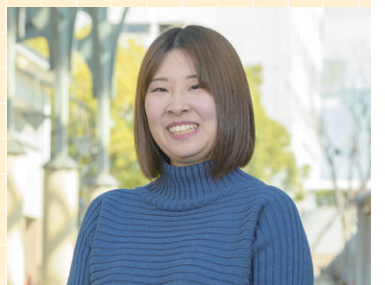
吉澤 積極的に学会などに参加して人脈を広げるよう努めています。都立大に来てからは、国立国会図書館や東京大学史料編纂所が近い環境面のメリットも存分に活かしています。研究では焦燥感にかられることもありますが、転機になったのは2024年に学部時代の同期と結婚したこと。研究以外の時間ができて心のゆとりが生まれ、妻と過ごす時間は何よりもリフレッシュになっています。

西尾 私も「双対型博士人材育成プロジェクト」や学振特別研究員で支給される研究費を使って自主的に学会などに参加しています。最近では、学会に参加している同世代の学生や実績のある研究者の方々と高いレベルで対話できるようになった実感があります。かつては未解明の現象ばかりの状況に疲弊し、研究に向き合うことができない時期もあったのですが、夜型だった生

活スタイルを朝型に変えたり、好きなバンドのライブ観賞やプロ野球観戦をしたりと、リフレッシュも大切にするようになりました。

沢崎 博士後期課程に進むと20代のほとんどを大学で過ごすことになり、多くの親御さんは「社会に出遅れる」と心配しがちです。また、女性であれば結婚や出産といったライフイベントへの不安が高まることは確かだと思います。実際に進学してみると、10人いれば10通りの生き方があることを実感しました。思っている以上に将来の選択肢は豊

富にありますので、興味のある分野の研究に打ち込みながら将来設計を進めていける良さがあると思います。



沢崎 薫さん

“好き”を仕事にするための過程もまた楽しいもの

——今後の目標を教えてください。

吉澤 博士論文での目標は、地元の「戦国大名」である長宗我部氏の事例を基に、中近世における全国的な権力構造の研究にインパクトを与えることです。また、過疎地域では古文書や伝承が消滅しかねないため、地元の四国山地での史料保全や古からの聞き取りも進めていく予定です。将来は、博士前期課程で取得した学芸員資格を活かして博物館に就職したいと考えています。現在は“好きを仕事にする”という夢を追いかけている段階



西尾 英倫さん

ですが、その過程も楽しんでいます。

西尾 現在はバイオマス化合物から有用な化成品をつくり出す技術開発を進めています。アカデミアで生き残ることは決して容易ではあり

ませんが、2025年度からは理化学研究所に勤務し、革新的な炭素循環型社会の実現に貢献することが目標です。実のところ私は京都大学を志望していたのですが、今では大学の名前ではなく、研究室でいかに努力するかで可能性は広げられると感じています。都立大は設備や支援体制も充実していますのでおすすめ。都立大に来て本当に良かったと思っています。

沢崎 私は現在、大動脈瘤や大動脈解離の救命率を高めるために、培養した細胞で人工的に血管モデルをつくることで発症メカニズムの解明へアプローチする研究をしており、新たな治療法の確立に貢献することを目指しています。2025年度からは博士研究員(ポスドク)として都立大に残って研究を続けますが、研究室で後輩が成長していく姿に喜びを感じている自分に気づき、将来は研究と教育どちらにも力を発揮できる大学教員を目指したいと考えています。

※記載の支援内容等は全て取材時(2025年3月)のものです。

領域リフレーミング双対型博士人材育成プロジェクト

領域リフレーミング双対型博士人材育成プロジェクト(旧:双対型博士人材育成プロジェクト)は、博士人材支援室が取り組む「博士後期課程学生支援プロジェクト」の一つ。国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)が実施する次世代研究者挑戦的研究プログラム(SPRING)の助成を受けて実施している。このプロジェクトでは、年240万円の研究奨励費および年30万円の研究費が支給されるだけでなく、次世代の高度人材に必要なとされるトランスファラブルスキル獲得のための様々なセミナーの提供に加え、きめ細やかなキャリア支援を受けることができる。本プロジェクトを含む博士後期課程学生支援の詳細については、博士人材支援室HPで情報発信している。

詳しくは
こちら

